「戦争」の反対語は「対話」です～戦後 80 年の 8 月に寄せて～

園長　野中　泉

毎日、毎日暑いですね。朝のお父さんお母さんとの挨拶でも、「おはよう」の前に「暑いねぇ」という言葉が、どちらからともなく思わず出てしまいます。今から 80 年前の 1945 年 8 月 5 日は日曜日でした。広島の天気は晴れ。日中は 32 度を超える暑さで、その夜、空には満天の星が輝いていたそうです。広島市に原爆が落とされる前日です。

80 年前の広島の人たちも、きっと、私たちと同じように「今日も暑いねぇ」と言い合っていたことでしょう。武器を持って戦っていた兵隊さんだけでなく、小さな子どもたちもいたでしょう。赤ん坊を背負うお母さんたちもいたでしょう。「明日のごはんは何にしよう」「明日は学校だから、早く、寝なさい」と、と団扇で子どもを扇いでやりながら、自分もウトウトするお母さんの姿を想像します。皆さんと同じような子育て家族の普通の営みが、80 年前の広島にもいくつも繰り広げられていたことでしょう。でも、それが翌日突然に奪われることを、その夜どれくらいの人たちが想像していたでしょうか。

日本が二度と戦争をしない約束した国となってから（憲法 9 条）80 年がたちましたが、この間も世界では、いろいろな国がいくつも戦争をし続けています。ソ連とウクライナの戦争開始のショックはまだなまなましいところです。

「戦争・暴力の反対語は、 平和ではなく対話です」そう言ったのは、経済学者で埼玉大学の名誉教授でもある暉峻淑子（テルオカイツコ）さんです。暉峻さんの言葉を抜粋ですが紹介します。

『対話は、ディスカッションやデイベートとは違い、勝ち負けのためでなく、人間としての感情も理性も経験も含む全人格での相手との応答です。一方的な命令ではなく、話し手と聞き手は双方から対等な人間として言葉を往復させます。～中略～　対話が発達の培養土であると言われるゆえんです。子どもの時に、コミュニケーションの快さを経験した子どもは、やがて討議デモクラシー（デモクラシーとは：民主的であること　民主主義）の担い手となるでしょう。～中略～　すぐさま武力に訴える対話能力なき国際関係を思う時、ひとりひとりの納得から出発する対話こそ、唯一の平和への道ではないかと考えます』

暉峻さんの言葉に深く共感しながら、自分たちのことを振り返らずにはいられません。アトムで私たちは、子どもたちとの保育室での日々にも、保護者の人たちとの懇談会でも、そして共に働く仲間たちとも。どうしたら、違いを認め合い、尊重しあう関係が生まれるのか。そのためには「対話」しかないと、一生懸命に、大事に考え続けてきました。でも、何年も何十年も考え続けて、トライし続けているのに、「対話」はちっとも簡単なことではありません。むしろ、難しく、めんどくさく、なんなら育ちも考え方も違う者同士「対話なんて無理だわ」と諦めたくなる場面の方がずっと多いのです。

それでも、もう一度、やっぱりあきらめてはダメなのだと自分を奮い立たせながらいます。なぜなら、アトムで私たちの目の前にいるこの子たちが私たち大人を見ているからです。この子たちが理由なく殺されたり、また誰かを殺す人になることを想像するだけで胸がはり裂けそうになり辛くて怖いからです。「明日もアトムだから、早く寝なさい」お母さんたちがそう子どもたちに声をかける明日が、これからもずっと変わらず平和であることを祈り続けたいと思います。